平成 25 年度 国際ボランティア貯金センターの支援にかかる

「NGO 講演会等概要レポート」

一般財団法人 ゆうちょ財団
国際ボランティア貯金センター

【ＮＧＯ講演会等の経費助成】

（平成 25 年度実施概要）

国際ボランティア貯金の寄附金の配分を受けているＮＧＯが学校、地域団体等で、国際協力及び国際支援の意識醸成を図るための講演会等を開催し、自団体の海外での事業活動状況等を説明する場合に、その経費の一部を助成しております。

概要は次のとおりで、申請により当国際ボランティア貯金センターで審査しました。

なお、対象となる平成 24 年度または 22 年度に寄附金の配分を受けた団体及び平成 25 年度 NGO 海外援助活動助成事業の助成を受けている団体には、文書で通知しました。

○ 助成する金額は、講演会等 1 回につき所要経費のうち 5 万円を上限。
ただし、助成回数は 1 団体につき 1 年 1 回。

○ 助成の対象とするのは、次の講演会等とします。

・国際ボランティア貯金の寄附金の配分を 24 年度または 22 年度に受けている団体及び平成 25 年度 NGO 海外援助活動助成事業の助成を受けている団体の講演会等であること

・参加者（児童・生徒等を含む）が概ね 30 人以上見込まれる講演会等であること

・平成 25 年 4 月から平成 26 年 2 月末日までに開催する講演会等であること

○ 助成は申請受付け順とし、6 件の申請があり、6 団体へ助成しました。

Index

1　特定非営利活動法人　アジア・アフリカと共に歩む会……1

2　特定非営利活動法人　国際交流の会とよなか……3

3　特定非営利活動法人　地球の友と歩む会……5

4　ハイチの会……7

5　特定非営利活動法人　プロ・ワークス十和田……9

6　特定非営利活動法人　ラブグリーンジャパン……11

7　アンケート結果……13

（50 音順）

特定非営利活動法人アジア・アフリカと共に歩む会

１．開 催 日：平成 25 年 9 月 29 日
２．開催場所：JICA 地球ひろば　セミナールーム 600
３．テ ー マ：「南アで根付く,学校・地域への教育・農業・スポーツ支援～20 年目を超えて～」
４．講　　師：①津山直子（GCAP JAPAN 代表、AJF 理事、関西大学客 員教授）
②平林　薫（TAAA 南ア事務所代表）
５．参 加 者：　29　名
６．内　　容：講演①「反アパルトヘイト運動と、日本のＮＧＯ活動とのつながりについて」
講演②「JICA 草の根技術協力事業『学校を拠点とする有機農業促進のモデル地域作り』について」

～ ～

講演会内容

第一部では、来年 2014 年に民主化 20 周年を迎える南アフリカ共和国のアパルトヘイト時代における反アパルトヘイト闘争、およびその時代から現在までの南アと日本の市民同士のつながりを振り返りました。

第二部では、「両国の市民同士のつながり」という視点をも含めて、TAAA が現地で行っている活動を説明しました。

■講演概要

(1) 講演①「反アパルトヘイト運動と、日本のＮＧＯ活動とのつながりについて」
津山直子　（GCAP JAPAN 代表、AJF 理事、関西大学客 員教授）

アパルトヘイト時代、南アフリカ共和国では、不屈の反アパルトヘイト闘争が続けられ、世界中で南アの人々への連帯運動が展開されました。南アや日本における反アパルトヘイト運動、ANC 東京事務所の活動と支援の広がり、TAAA など南ア現地を支援する国際協力活動の誕生などを「南アと日本の市民のつながり」という視点で振り返りました。

講演中には、実際に反アパルトヘイト運動をされていた参加者にも当時のことを語っていただきました。

(2)講演②「JICA 草の根技術協力事業『学校を拠点とする有機農業促進のモデル地域作り』について」平林薫（TAAA 南ア事務所代表）

先ず背景として、なかなか進まない教育環境改善や教員組合にかかわる問題などの教育問題、および教育以前の生徒達の困窮した生活状況などを説明しました。そのような中で、「なぜ、日本人がこれほど南アの教育のために尽くしてくれるのか」と教師たちにいわれるほど、現地で役に立ち喜ばれている TAAA の活動内容を写真をお見せしながら紹介しました。

国際ボランティア貯金の配分事業による学校図書支援活動については、昨年寄贈したコンテナ図書室を含めて、学校に図書室ができ図書環境が改善されている様子、そのような環境の中で生徒達が図書委員会をつくり自主運営している様子、研修会で教師たちが司書訓練を受けている様子などをお伝えしました。

今年の 8 月に始まったばかりの JICA 草の根技術協力事業としての学校菜園プロジェクトにおいては、生徒による菜園活動の他に、若者菜園グループができて、学校の敷地内で将来の自活をめざして菜園技術を学びながら畑仕事をしている様子もお伝えしました。

学校を拠点として、TAAA の活動が根付き、コミュニティにまで広がっている様子を伝えました。参加者からは「現地に日本人プロジェクトマネージャーがいて先生や生徒と一緒に活動している様子から、両国の市民同士の交流という視点からも活動を評価できる」「研修会で教師が司書のスキルを学んだり、生徒達が自主運営している様子から、ただ図書環境を整えるだけでなく、自立して運営できるように人を育てている様子が伝わった」といった感想が寄せられました。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：基礎学力と読解力向上のための学校図書室設置と巡回訪問指導
■実施期間：平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月
■実施地域：南アフリカ共和国クワズールーナタール州・ウグ郡内ムタルメ・トゥートン学区

対象校に本棚や本を配布して図書室を設置・改善し、教師や生徒が本にアクセスできるよう図書環境を整えています。それにより、読書の習慣を身につけることで、生徒の基礎学力、読解力向上を目指します。

また、プロジェクトマネージャーが移動図書館車で各対象校を巡回訪問し、生徒達に積極的に図書を導入し読書を推進するとともに、教師を対象とした研修会を開催し司書教師としての技術指導を行っています。

特定非営利活動法人国際交流の会とよなか（TIFA）

１．**開 催 日**：平成２４年１２月１３日
２．**開催場所**：とよなか国際交流センター会議室２ＡＢＣ
３．**テ ー マ**：「ネパールの農村の女性の自立を助ける活動」
４．**講　　師**：①氏名（バティ・シュレスタ　ネパール人講師・島本真知子 プログラム責任者）
②氏名（吉川順子　キルト工芸専門家）
③氏名（中園　俊也　デザイン会社社長）
５．**参 加 者**：７０名
６．**内　　容**：講演①　「ネパール・サクー村での活動」
講演②　「ドダウリ村でのキルト工芸指導について」
講演③　{ビジネス化への見通しについて}

～ ～

講演会内容

国際ボランティア貯金の配分事業を中心にネパールの紹介と農村女性の自立支援活動について。
制作品の展示。

■講演概要

講演①「ネパール・サクー村での活動」バティ･シュレスタ･島本真知子

サクー村での活動を映像を見せながら、説明。
ブラウス、パンツ、袋物など縫製品、手袋、レッグウオーマー、帽子など編み物製品、ダカ織りのスカーフ、ショール類など現地で制作した物を当会で販売している。日本で販売するのはなかなか難しいが、編み物はよく売れているので、現地へ売り上げを送っている。
近くのウグラタラ小学校の子どもへ奨学金、全校生徒へ週 2 回の給食を出せるよう資金援助し、貧しくて弁当を持って来られない子どもも学校へ来るようにしている。

講演②「ドダウリ村でのキルト工芸指導について」講師名（吉川順子　キルト工芸専門家）

1）ネパール現地での指導を引き受けた経緯
日本でキルト学校の校長をしていたが、フィリピンのカオハガン島へ移住し、何も仕事のなかった島民にキルト工芸を広め、今では収入の大半がキルト製品になり、島民達から喜ばれ、日本でも販売が好調なので、ネパールの田舎の女性の支援になれば･･･と思い、指導を引き受けたことなど、フィリピンでの様子を交えながら説明。

2）現地での体験と今後の見通し。
葛西代表の懇願により現地での指導をはじめたが、言葉の壁で苦労、現地の布は色落ちがひどい、女性達はいままで絵を描いたことがない（学校へ行ったこともない人が半分･･･）など難問がたくさんあったが、みんな楽しそうに学んでくれて、それなりにおもしろい物が出来てきている。多忙のため、何度も現地へ行くことは出来ないが、常に連絡を取り、送られてきた物へのアドバイスなどをしながらすすめている。これからの成長を期待している。

3）現地の様子、キルト工芸指導の様子を映像で紹介

講演③ビジネス化への見通しについて　「中園　俊也」（デザイン会社社長）

良い物を作ることが一番大切だが、現地の人たちが頑張って作り続けていけるよう日本でのマーケットを開拓する事も大切。現在吉川関係、中園関係で協力者を開拓しているが、もっと関心を持って販売してくれる場所を作る事が大切である。パンフレット、チラシなどの工夫も必要。

参加者の感想

＊ネパールの山のことは知っていたが村の様子を知ることが出来た。何か出来ることがあればしたい。
＊プログラムに参加している人はどんな状況の人で、彼らへの報酬はどこから出ているのですか？
＊キルト製品のデザイン、技術向上を期待したい。まだまだ買いたくて買うのではなく、義理で買っている状況だ。
＊ベッドカバー、こたつカバーなどのような実用的なキルト製品も作れるようになったらよい。
＊日本だけの販路ではなく、もっと販路を開拓すべきだ。
＊自分も活動しているが、これからもできるだけ手伝いたい。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：住民の生計向上のための縫製･パッチワークキルト技術指導（ネパール）
■実施期間：平成２５年　４月から平成２６年　３月
■実施地域：ネパール・シンズリ郡ドダウリ村

[

講演会のもよう

終了後講師とスタッフ

ネパールダンスの紹介

特定非営利活動法人地球の友と歩む会

１．開 催 日：平成２５年６月２８日（金）
２．開催場所：長崎外国語大学（小鳥居　伸介教授「国際協力地域論」）
３．テ ー マ：「インド・デバトール流水域開発事業紹介と国際協力・異文化理解」
４．講　　師：米山　敏裕（地球の友と歩む会・事務局長）
５．参 加 者：８０名

～ ～

講演会内容

当会が平成２５年４月より「国際ボランティア貯金交付助成」ですすめている流水域開発事業についてスライドをつかって紹介していった。

事業地となっている南インドタミルナドゥ州コタヤム村、デバトール村２か村は年間の降雨量が650㎜ と極端に少なく、農業をするのは困難となっている地域で雨季に降った雨を有効に活用するために治水工事、植林、有機農法による活動をおこなっていくことに、少しずつ農耕地を増やしていくことが可能となっていくことを説明した。

日本ではなかなかイメージできないのが降雨量で学生に日本の年間降雨量がどれくらいあるか聞いてみたが、あまり答えられなかった。また、森林の率も知らない学生が多かった。ちなみに日本では降雨量が 2300㎜ あったり、森林の率も 68%にもなっている。

今回の事業地では 20%と少なく、森林伐採や水不足によって森林が減少している。そのため、水分を貯めていく工事をすることによって、農業ができる環境ができていくことになる。

また、健康の維持に欠かせない飲料水も雨を貯める工事をすることによって地下水を確保していくことになる。農民の生活を守ったり、持続可能な農業をすすめていく上にも流水域開発事業は大きな意義がある。

インドのことを紹介していくなかで文化の違いは何故起こるのだろうか、ということで漫画を例にして、国際協力とはなにか、対象地域の文化を考慮しないと、国際協力も無駄になるし、摩擦も出てきたり、ときには戦争にも発展していくことになることを漫画では説明していった。

その他、私たちの周りで起こっている習慣の違いや文化の違い、そが原因ともなっていく差別や偏見、これらを少なくしていくにはどうしたらよいのかについて学生に問いかけていった。やはり多くの意見としてだされたのが交流をしてお互い理解し合える関係をつくること、お互いの国や地域、人々を理解するために勉強していく、またコミュニケーションのひとつである言語を修得していくことが挙げられた。

最後に学生さんへのメッセージとして長崎外国語大学で学ぶことの意義はお互いに国が違うので外国語を学ぶことによって少しでもその国のことを知り、近い関係をつくっていくことに繋がっていくことになる。たとえば、外国から来た人が訪問した国のあいさつなどをその国の言葉で聞くとうれしくなり、親しみが湧いてくるものである。

言葉がもつ力であるし、理解し合える第一歩となるものである。

NGO 講演会の様子
長崎外国語大で講演をする米山敏裕

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：農村における土壌侵食防止のための治水工事及び有機農業指導（インド）
■実施期間：平成２５年４月から平成２６年　３月
■実施地域：インド

ハイチの会

１．開 催 日：平成２６年２月１日
２．開催場所：ウィルあいち　第５会議室
３．テ ー マ：「ハイチ共和国はどんな国？～ハイチを忘れないで～」
４．講　　師：①氏名：畜産専門農業指導員　野口 知子
②氏名：筑波大学大学院人文社会科学研究科　小倉詳悟
５．参 加 者：３２名
６．内　　容：講演①　「ウシ購入と講習会などの農業指導の報告」
講演②　「ハイチを訪れて～一大学院生が今考えていること」

～ ～

講演会内容

■講演概要
来賓の在日ハイチ共和国大使ジュディ・イグザビエ氏、外務省中南米局中米カリブ課廣田千里氏の挨拶があった。次に 2013 年夏に当会プロジェクトで農業指導をした野口知子が「ウシ購入と講習会等農業指導の報告」と出席者との質疑応答をした。また 2013 年 2 月に KFP の農業計画の調整を図った小倉詳悟は「ハイチを訪れて」とする報告と問題提起による出席者との意見交換を行った。ピエール・マリー・デイオジェンのほかハイチ人からは 2010 年 1 月の大地震で親兄弟を亡くした辛さを訴えると同時に、日本をはじめ世界中から受けた支援へのお礼が述べられた。
会場には講演者のハイチでの活動の写真展示と、地震発生時から現在に至るまでの写真展示、当会の活動「総合農園」や「学校の子どもたち」のパネルの展示、ハイチ料理の試食、グッズや本なども並べてハイチを身近に感じる設置をした。

⑴講演①「ウシ購入と講習会などの農業指導の報告」講師名（畜産専門農業指導員　野口 知子）
1、自己紹介（北里大学（獣医畜産学部畜産学科）卒業後教師、青年海外協力隊（セネガル）
２、派遣の動機は会の目的『農業で今日の命をつなぎ、教育で明日のハイチを創る』に共感したから。
３、事前準備としてテキストの作成をした（内容…牛が人にもたらすもの、購入してから搾乳するまでの流れ、体型（乳牛と肉牛の違い）、健康に飼うために（餌・環境・病気と予防など）、飼育方法（生まれてから分娩まで）、搾乳方法、人の健康管理（トイレ・マラリアなど）、見通しを立てることの大切さ）」
４、ハイチでは次の活動をした。
①打合せ、②市場で牛を購入、③講習会・牛について（牛の種類、牛の役割、乳牛の体型、酪農のメリット、牛の病気、子牛が生まれてからの話、循環農業、繁殖、分娩、牛を世話する人が病気にならないために）、トイレについて、マラリアについて、見通しを立てることについて、米について、蚊取り線香の作り方、たわしの作り方など。
５、村人との話合をした。（アンケートの実施、農業相談、貧困や病気についての調査など）
６、購入したウシの現状調査（牛小屋、水、環境）と農業指導をした。
７、自立についての話合をした。
８、感想（若者たちのやる気が、さらにその上の世代や下の世代に伝わり、彼らのやる気を引き出して好循環になることを願い、自立に向けて彼らの希望と自信が続くようなサポートに携割りたい）

(2)講演②「ハイチを訪れて～一大学院生が今考えていること」講師名(筑波大学大学院人文社会科学研究科　小倉詳悟)

１、自己紹介（筑波大学 国際総合学類）

２、関わる理由は DAYS JAPAN のハイチの写真を見た時から。

３、ハイチでの活動①支援先の学校で１day クリニック開催、②ソーラーボトル作り、③キャッサバ工場の見学、④校内測量、⑤チャコール作成、⑤ダウンタウンでの調査、⑥校内のペンキ塗り、、

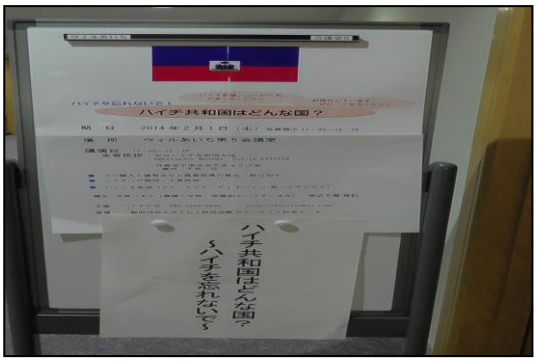
４、今考えていること（開発に対する意識の変化、問題意識の芽生え、援助を取り巻く環境の整備をしていくことも重要、NGO などの社会的認知度や価値が高い欧米に比べ、日本は政策で優先順位は低く NGO 自身の能力も限定的(資金難,組織力の低さなど)だ。NGO などの市民団体を取り巻く現状と可能性の扱いを考えている）

参加者の感想

・会の活動は現地の為になっていると思う。
・ハイチの事を今までよりも多く知る事が出来た。
・１つ１つの支援を実現してゆくことの重要性を改めて感じ、実行していることに敬意を表します。
・若い研究者の体験談を聞きそれに対する年長の支援経験者の方々のアドバイスも聞き勉強になった。
・ハイチの現在、過去の取り組みが分かり展示も有り良かった。
・準備が良く出来ていた。
・知らない処で立派な活動をしている人が居る事に感動した。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：畜産育成等農業指導「ハイチ」
■実施期間：平成２５年４月１日から平成２６年３月３１日
■実施地域：Republic of Haiti　Sant　Hinche　Bonabit
ハイチ共和国　中央県　エンシュ市　ボナビ村



特定非営利活動法人プロ・ワークス十和田

１．開 催 日：平成２５年１０月２０日（　日　）
２．開催場所：水彩カフェ（福島県）
３．テ ー マ：「ご当地！NGO 発！青少年研修とベトナム交流講演会」
４．講　　師：①児童指導員・中野未央
②児童厚生員・横田佳奈
５．参 加 者：３８名

～ ～

講演会内容

■講演概要

⑴ 講演①中野未央（児童指導員）

講師の未央氏は福島県若松で生まれた。父、母は学校の教師で、一家で台湾の日本人学校の教師をした時もあり、アジアに大変興味あると言っていた。路上の屋台やそこで食べる家族、和やかな風景がそこにあると言っていた。

そのような環境で育った未央氏は、今回のベトナムでの幼稚園派遣の話が母から聞かされた時に二つ返事で指導に行くと答えた。

仙台の空港に集合した時には背中のリックが嘘のように軽かったことを強調していた。

韓国のインチョン空港では長い通路を足早に歩いた時、またハノイの空港からの夜景を見ながら初めてのベトナムに来たことを嬉しかったことや明日からの期待でわくわくしたと話した。

ホームステイ先の家では、調整員が 5 年間来ているので皆さんがやさしく普通に生活をできたこと、食事は一階の居間でゴザをひき家族と一緒に輪になって食べ、美味しさを味わいました。

福島県須賀川市出身の先輩が「国際ボランティア貯金」事業で平成 22 年に建設したタンクオン幼稚園での指導できて喜んだこと。東北大震災で疲弊している今こそ青少年育成として、ふるさと応援のために今回の派遣に繋がったことへの思い、日本での幼児教育を通じてイエンズン県内の 3 幼稚園でベトナムの幼児たちと遊び指導したかったことをパワーポイントを使い、ベトナムには無い紙粘土などを使い伝えた。幼児たちが成長して日本とベトナムの友好がさらに強くなることを願っていると話した。

⑵ 講演②横田佳奈

須賀川市に生まれ、音楽教師を目指して中学校の教師資格をえて、須賀川市立保育園で児童厚生員として主に歌やピアノを中心に教諭活動をしていて、今回のベトナム派遣の事を未央氏の母を通じて働いている保育委園長から伝えられたこと、自分が外国で同じアジアの保育園で音楽指導ができると思いすぐに了解しましたこと、園長先生が 16 日間の自分の代わりをしてくれて嬉かったこと、同じ須賀川出身の先輩が青森県民の力を借りペットボトルを集め、「国際ボランティア貯金」寄附金を受けて建設したこと、震災で疲弊している今こそ福島県の青少年育成のためにも派遣を決めたこと、音楽を通じてベトナムの幼児たちの教育に関われ嬉しかったことを話した。

タンクオン幼稚園では、以前日本で研修をした教諭が居て、まだ少し指導がいることを感じ、

自分がどれも得意分野なので良かったこと、幼稚園では教諭を中心に両手で引けるように（ベトナムではリズムの伴奏が無い引き方）幼稚園の音楽教本に伴奏の音符を書く書き方や弾き方を指導して教諭達と児童たちの表情が変わるのがわかった時はうれしかったことなどを話した。

タンクオン幼稚園を中心にほかの２幼稚園と１小学校での授業は意義のある楽しい思い出となったこと、これからもアジアの皆さんと音楽を通じて友好ができると良いと思ったことを話した。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：幼稚園の備品の配備及び教員養成指導（ベトナム）

■実施期間：平成２５年４月１日から平成２６年３月３１日

■実施地域：ベトナム社会主義共和国

ベトナム国バクザン省イエズン県タンクオン村タンクオン幼稚園で

【柱向かって左：横田佳奈教諭、右：中野未央教諭、左端：中野正三理事長（プロワークス十和田）】

５歳児クラスの子と佳奈先生のオルガンに合わせて、未央先生と児童は椅子取りゲーム。

トゥー園長先生より日本の幼稚園事情について質問を受ける未央先生（右）佳奈先生（右から2人目）。

佳奈先生の音楽をBGMにし、物語を一緒に聞きました。

特定非営利活動法人ラブグリーンジャパン

１．開 催 日： 平成 25 年 8 月 3 日（土）
２．開催場所： 鎌倉市大船行政センター　学習センター　3F
３．テ ー マ： 「国際ボランティア貯金事業説明会とネパール音楽の夕べ」
４．講　　師： ①氏名　NPO 法人ラブグリーンジャパン現地駐在員　鈴木倫子
②氏名　横浜国立大学　大学院教授　　金子信博　氏
③氏名　Mr.Rajiv Ratna Shakya（事業地：カブレ出身）
③氏名　Mr.Rshan Ratna Kansakar（事業地：カブレ出身）
５．参 加 者： 48　名
６．内　　容： 講演①　「国際ボランティア貯金配分による事業説明―現地に駐在して」
講演②　「ラブグリーンジャパンの活動における土壌調査の重要性」
講演③　「ネパール国でも活動に関しての感謝の弁　など」

～ ～

講演会内容

■講演概要　PM6:10　定刻に相川理事長司会によって、国際ボランテイア貯金配分事業について、現地駐在の鈴木倫子による事業地での活動報告、横国大教授：金子氏による土壌調査、管理の重要性について説明あり。ラジーブ氏によるカブレ郡における活動への感謝を表明、
休憩後 PM6：45～　ネパール音楽を聴く　途中休憩を挟み　終了は PM8:30　でした。

(1)講演①　NPO 法人ラブグリーンジャパン理事長相川の司会により、現地駐在員：鈴木倫子の一時帰国に合わせて、平成２５年度ゆうちょ財団支援事業について現地報告。
昨年度,そして本年度において実施された事業、＜有機農法、家畜飼育の事業＞をどのように村で実施してきたか、スライドを使って説明する。そして、2013 年 2 月現地視察に同行した横国大：金子教授による土壌調査をした経緯と今後の重要性について指摘説明を受ける。

(2)講演②「Mr.Rajiv Ratna Shakya（事業地：カブレ出身―通訳）　」講師名(所属及び肩書き)
ラジーブ氏はウペンドラ＆フレンズを率いてきたプロデューサーでカブレ郡、パトレケット村の出身であり、現在４1 歳。音楽の説明の中でラブグリーンジャパンへの感謝の弁を織り込んで司会を務める。村が住民参加型の事業によって、随分と変わってきていることを感謝とともに説明する。

(3)講演③「　Mr.Rshan Ratna Kansakar（事業地：カブレ出身）　」講師名(所属及び肩書き)
昨年に続いての音楽会の企画、ルシャン氏はカブレ郡パンチカール村出身の 39 歳（現在カトマンズ在住の音楽家）村に暮らす彼の家族は LGJ の現地事務所近くに暮らしている。この２０年間で村は変わってきたと説明。二次会にて彼から出席者に詳しい説明がなされた。

講演後は参加者の前にて、感謝を込めてネパール音楽を演奏してくれる機会となりました。
今回の演奏会は相川理事長とラジーブ氏との交流から、昨年に引き続いての企画となり、ネパール人から LGJ の活動に感謝する会をもって欲しいとのことから今年も実現しました。ネパールを理解するとともに活動を報告する会としてとても重要であることを改めて認識しました。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：有機農法及び家畜飼育の指導、農業センターの修復（ネパール国・カブレ郡）

■実施期間：平成 25 年 4 月から平成 25 年 3 月

■実施地域：ネパール国カブレ郡にあるアナイコット村にて

会場の様子　：

報告会の受付（インターン、学生の協力）

駐在員：鈴木倫子による現地報告

ラジブ君によるネパールからの感謝の弁

ウペンドラ＆フレンズの演奏会

今回の活動報告会は昨年に引き続いて実施しました。予定した 50 名の人たちが参加してくれました。活動について現場からの具体的な話を聞くことがよかったようです。ラブグリーンジャパンへの関心が深まり、会員登録してくれる方が今回もいました。普段、聴くことがないネパール音楽のプロによる生演奏で聞いて、ネパールへの関心も高まり、学生たちによるスタディーツアーの計画要請がありました。

NGO講演会　アンケート集計結果報告書

【全体：176名回答】

Q1：　開発途上国への支援については、国同士が行っているほかに、本日の講演会等のようにボランティア団体(NGO)が住民等を対象とした支援・援助を行っていることを知っていましたか。

回 答 内 容		回答数	%
1	知っていた	122	69
2	知らなかった	51	29
3	未回答	3	2

Q2：　本日の講演の事業は「国際ボランティア貯金」の寄附金の配分を受けて実施されましたが、事業内容について理解できましたか。

回 答 内 容		回答数	%
1	よく理解できた	83	47
2	まあ理解できた	84	48
3	理解できなかった	4	2
4	未回答	5	3

Q3：　今後もいろいろなボランティア団体が開発途上国の住民等へ支援・援助することは必要だと思いますか。

回 答 内 容		回答数	%
1	必要だと思う	148	85
2	国同士で行うだけで十分	13	7
3	分からない	13	7
4	未回答	2	1

Q4：　ボランティア団体は寄附金の配分を受けて活動している話しをしましたが、今後も寄附によりボランティア団体を支援する制度は必要だと思いますか。

回 答 内 容		回答数	%
1	とても必要だと思った	109	62
2	まあ必要だと思う	55	31
3	特に思わない	4	2
4	未回答	8	5

Q5：　今日の講演を聞いて、自分も寄附をしたいと思いましたか。

回 答 内 容		回答数	%
1	したいと思った	93	53
2	特に思わなかった	39	22
3	すでにしている	40	23
4	未回答	4	2

Q6：　今日の講演を聞いて、ボランティア活動に参加してみたいと思いましたか。

回 答 内 容		回答数	%
1	したいと思った	101	57
2	特に思わなかった	35	20

3	すでにしている	35	20
4	未回答	5	3

年代別	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上	未回答
	5%	25%	12%	15%	17%	25%	1%

男女比	男性	女性	未回答
	44%	54%	2%

【講演会の感想（抜粋）】

・ ボランティアをする時間がない日本の社会人の生活はおかしいと思った。もっとボタンティアができる様に余裕のある生活がしたい。（50 代/男性）

・ 日本と現地の関係を向上させる意義を考えさせられた。今後の国際協力なくして、日本の未来はないと思う。（40 代/男性）

・ 他国を知り、自分自身を高める活動なので、若い世代の方々に活動して欲しいと思う。この活動をたくさんの人達に知ってほしいと思うし、その為の広報活動も広めて欲しいと思う。（50 代/女性）

・ その国の「住民」が必要とする援助を行うことが必要と思う。（60 代/女性）

・ お互いの国を理解しているようで、私達は無意識の内に、勝手なイメージで偏見や差別をしていることにも気づくことが出来、改めて異文化の本当の理解について、考え直しました。（日本人学生）

・ どのような国にしても、それぞれ文化の背景があって、交流しないと思考や価値観を交換出来ないと思います。（留学生）

・ 先進国と発展途上国の間の問題は、どうやっても埋まりにくいものだと思う。先進国で行っていることを、途上国に薦めても、一からのスタートで、維持費などの問題も出てくる。私達はなにをすることが一番良いのか、難しいと思った。（日本人学生）

・ たまたま通りがかりに時間が許す間参加するつもりだったが、講演内容に引き込まれ聞きいることになった。知らないところで立派な活動をしている人達が居ることに感動した。テレビや新聞に出ていない人達の活動を知ったが広報されていないのはもったいないと感じた。（30 代/男性）

【注】

・ 国際ボランティア貯金の制度のような寄附による支援を 90%以上が必要だと考えている。

・ 上記のことから、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けた団体による講演会（報告会）は、国際ボランティア貯金の有効性や周知度高めるために効果があり、国際協力への興味や実践への情報提供の貴重な場になると思われる。